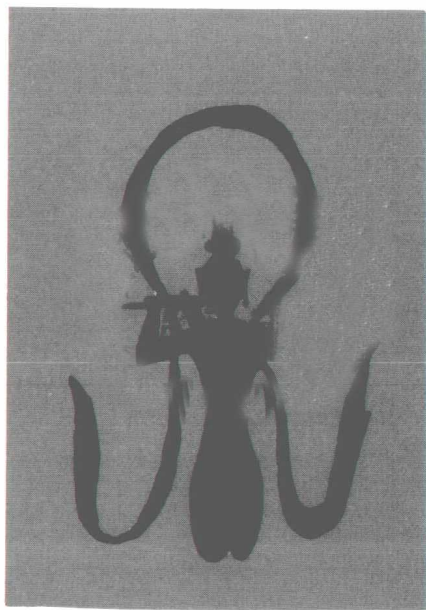


親 鸞

第三卷

丹羽文雄



新潮社版



親
鸞 第三卷

昭和四十四年七月二十日 印刷
昭和四十四年七月二十五日 発行

著 者 丹 羽 文 雄

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)(260)一一一一
〒一六二 振替東京八〇八

定 価 六〇〇円

△乱丁・落丁本はお取替えいたします△

親

鸞

第三卷

目次

運命の出会い

セ

身辺雑事

六

明恵高弁

八

夫婦の契

九

平家物語

二

赦免

三

法然歿後

一六

東国行

一七

稲田

一八

教化の杖

一九

慈円の予言

二〇

插装
画帧

羽
石
光
志

親

鸞

第三卷

運命の出会い

瘡瘡^{はうそう}除けのまじないには、紅で鍾馗^{しゆんわう}を描いた絵が売出された。鍾馗の代りに達磨^{だまら}を描いたのもあった。瘡瘡にかかれば、処置なしであった。瘡瘡が自然に下火になるのを待つよりはかまなかった。

そのような京都の中で、伊勢平氏の殘党盤五家次が捕えられた。平氏追討がまったく終っていたわけではなかったのだ。

和歌所では、寄人^{きじん}が後鳥羽上皇の命によって、「今古珠玉集」を選んだ。

慈円が、天王寺別当に補された。慈円はこつこつと、「愚管抄」を書きつつづけていた。世の中の出来事に対して、慈円はつよい好奇心をもっていた。政治や朝廷内の人事、鎌倉のこと、世間話に興味をもっていた。九条兼実は、「玉葉」なる日記を残した。弟の慈円は「愚管抄」を書きつつ

けている。九条家の一族である三条長兼は、「三長記」なる日記を書いていた。このことは、偶然だったろうか。兼実にしろ、慈円にしろ、長兼にしろ、後世のために日記を残したいと思っていたのではあるまい。日記をつけるひとは、ほかにいく人もいたが、日記を書きつつづけるというのはよほどの根気の要ることである。九条家の血の中には、そういう素質がつよくながれていたのであらうか。日記というものの後世における重要性は、考慮の外であったらう。もっともかれらの日記が、公平な立場で書かれていたとはいえない。慈円など、ひどく主観的であった。

六十歳に近い鴨長明は、しきりと文字を書きつつづけていた。定家も、「明月記」を書いていた。「明月記」の中で、定家は念仏宗を弾圧しなければならぬと書いた。が、長明にしろ、定家の日記にしろ、それは兼実や慈円や長兼などのように年月日を明記した具体的なものではなかった。

承元元年十一月二十七日、最勝四天王院の供養に因って、大赦が行われることになった。後鳥羽上皇は、最勝四天王院の供養だけでなく、比叡山三塔に、一日大般若經の書写供養も行なった。十日ほど前、春華門院の葬儀があった。そのため大嘗会^{だいじょうかい}も取りやめになり、五節も停止になった。古くからの習慣に従い、宮廷に幸不幸があれば、大赦が行われた。この年に順徳院の大嘗会が行われるはずだっ

たので、前々から大赦のあることはわかっていた。

十二月八日の日付で、藤中納言光親が法然のもとに赦免の宣旨をもって来た。

法然の流罪は、南都北嶺に対する一時的な申訳のためであつたことが明らかとなつた。後鳥羽上皇が流罪を悔いての赦免ではなかつたが、公卿たちの法然に対する同情が大きかつたせいもある。

しかし、おなじ流罪となつた淨聞、禪光、好寛、成覚、法本、親鸞に対しては何の沙汰もなかつた。

親鸞らは、大赦の恩典からわすられているようであつた。もっとも流罪になつたとき、都払いのように追放されたのである。法然の弟子の何人かも同時に流されたというだけで、そのため慈円の「愚管抄」にも書きこまれなかつたのだ。「元亨釈書」にも載せられなかつた。

法然は、流罪先から押部で船を下りた。が、京都にはいることは許されなかつた。法然は箕面の奥の勝尾寺にはいつた。勝尾寺は源平の争いのとき、平家方がかくれていたの、焼き払われた。それを熊谷直実などが再建した。勝尾は、真言宗の大刹であつた。

箕面の滝は、ふかい谷あいのの細い道を辿れば、ゆきつくが、滝の上に出ると、あたりはいかにも仙境を思わせた。流刑地からもどり、京都にはいるまでの一時期をここです

ごすのは、七十九歳の法然には心身ともに休養になるようであつた。

法然の皺は一段とふかくなつたようである。肥満型のその顔には、いくらかむくみがきいているようにみうけられた。が、とくに病氣というのではなかつた。

「……辺鄙に赴きて田夫野人にすすめんこと、年来の本意なり、しかれども時至らずして、素意未だ果さず。今事の縁によりて、年来の本意を遂げん事、頗る朝恩ともいふべし」

出発前の法然の希望は、ほぼ達せられたようであつた。法然は念仏を唱えた。法然が赦免になつたとき伝えて、京に残つていた弟子たちがあつまるようになった。一般のひとびとも訪れるので、次第に勝尾寺は吉水時代に似てきた。法然は吉水の禪室におけるように、聴聞者に法話をした。

「淨聞房や親鸞房は、どうしていられるだろうか」

弟子たちの間で噂になつた。

「いずれ赦免となつて、京に戻つて来られるであらう」

法然は流罪先で、流罪になつた弟子たちのことをしばしば話題にしていた。

「親鸞房たちには、とくに宣旨が下りなかつたということでごさいますか」

と、ひとりが法然にいった。

「あのご房たちには、私の心がわかつている。赦免となつても、いそいで京に戻ることはあるまい」

「でも、せっかく赦免となりながら……？」

「越後の親鸞房は、どうしているであらうか。私がここに戻ったことを、風のたよりに耳にしているであらう。越後はすでに雪の国になっていいるであらう。土佐とはちがい、住みにくいところと聞いている。親鸞房はたとえ赦免になつても、京へは戻らないであらう」

確信があるように法然は答えた。

越後はすでに雪の世界であった。

親鸞が法然の赦免を知ったのは、国分寺の寺目付役の中沢兵部広泰に呼ばれたときであった。

「師の房は、京におかえりになりましたか」

と、目をうるませた。胸のつかえがとれたようであつた。

親鸞は師の年齢をたえず思っていたからである。

「しかし、すぐ京都にはいることが許されず、摂津の勝尾寺におはいりになったそうです」

「京におはいりになれなかつたのですか」

と、朝廷のあつかいに釈然としなかつたが、

「師の房のおかえりは、ただちに門弟の耳にはいることでしょう」

吉水の禅室は、輪慧が守ることになっていた。赦免のことを、いち早く輪慧は聞いていたであらう。親鸞は、五郎七や義兄のことを思つた。法然が赦免となれば、ひきつづいて自分らの赦免もあるものと、五郎七たちは期待しているであらう。

「いずれ親鸞房にも、御赦免の通知はあるものと思います」と、中沢がいった。

当然親鸞も、それを予期した。

「しかし、私には、たとえ赦免となつても、いそいで京にかえつてよいものかどうか、そのときにならなければわかりません。わが身ひとつのことを思えば、かえりたくもなるでしょうが、浄土宗のことを思うと、私には師の房の教えもありますので、おいそれとは帰国は出来ません」

すでに越後地方には、念仏宗がある程度ひろがっていた。越中を中心とした北陸道には、念仏僧がいた。ここでは、一念義が浄土宗の看板となつていた。西仏は、一念義の信仰者であつた。しかし、親鸞にとっては、越後は未開の土地にひとしかった。京を追放になったときから、いかに念仏をひろむべきかと、布教の重大さを考えていた。自分の手で念仏をひろめねばならないのである。それには、まだ何も手をつけていなかった。僅かにお種が、念仏を唱える

ようになっただけであった。

「竹の前の草庵には、お馴れになりましたか」と、中沢が微笑をふくんでいった。

「結構な住居と感謝しております」

庵は、三方を竹藪でかこまれていた。そばに、小さい池があった。それらがすべて雪に埋まった。

「越後のくらしというものは、この季節になって、はじめてわかるのです」

「よい季節に來たせいか、京都のくらし方とこの地方のくらし方のきびしいちがいが、よくのみこめなかったのですが、やっとわかるようになりました」

と苦笑する。

「季節だけの問題ではすみません。ご房は宗教上にも、また人間というものにも、いろいろと発見されるものがあります」

「土地のひとは、夏の間から冬の支度をしているのです」

「冬の支度とは？」と、中沢がいった。

「かんじき作りです」

「ああ、あれですか」

かんじきに三種類あることを、親鸞は知った。

円かんじきというのは、柴木や山竹をたわめ、差渡し九

寸ばかりの輪をつくり、縦横二筋ずつ藁縄を張り、緒をつけたものであった。

鼻かんじきというのは、円かんじきをすこし長方形にして、先端を反らせたものであった。雪の山路に使用するものである。

鶴かんじきは、長さ一尺四寸、幅一尺、厚さ五、六分ばかりの木を六本くくりつけ、その真中五、六寸のあいだを縄で編んで、緒をすけて履くのである。これは家のまわりの雪をふみしめて固めるために使用された。ふみつけたあとは、箒目ほうめをつけたようにきれいになった。

かんじきは、泥田で田植えをするときにも利用された。

すがりかんじきというのもあった。輪の中を縄で格子に結んで、緒をつけた。雪がうんとつもったとき、円かんじきの下にこれを履き、取縄をかんじきの先につけて、これを肩にかけ、両手で、持ちあげながら歩くのである。

藁杓わらしやくは、雪のふりつもる時に用いられた。

藁帽子や、はっぱき、深杓などが作られた。

雪国ではかんじきなしでは動きがとれないということを教えられても、親鸞にはその実感が得られなかった。しかし、ようやくそれもわかった。

越後は雪が深くなった。

越後の守護職が佐々木盛綱であることを、親鸞は中沢か

ら教えられた。が、盛綱は現地にいなかった。
「京か鎌倉にお住いです」

と、中沢はいった。

中沢の説明で、九条家の莊園のこともくわしくわかった。頸城郡板倉郷に、三昧莊と笹倉莊の二つの莊園があった。三昧莊は九条兼実のものであり、笹倉莊は息の九条良経の所領であった。良経の莊園は、死後土佐と領地替えとなったものである。

「頸城平野はほとんど頼朝公の直轄の土地です。こんなところに公卿の莊園がまざれこんでいるというのも不思議ですが、頼朝公と九条兼実卿のふかい関係を考えると、特別にみとめられていたことも理解出来ます」

「その九条家の莊園を、三善氏が世話をしていたのですね」

「三善家と九条家とは、古くから関係があったようです。当主の三善為教氏は、この地方ではめずらしく教養のある人物です。私とは親交があります。いずれ折をみて、おひきあわせしたいと思っています」

雪がすこし小降りになったのを見て、親鸞は寺目付役の館を出た。笠をかぶり、蓑みのを羽織り、雪の道を歩いた。雪の降らない季節には、草庵から中沢広泰の住居は近かったが、それが、五倍にも六倍にもとおくになった。見

まわすかぎり雪の世界であった。葉香がきゅっきゅっと雪を鳴らした。鉛色の空は、地上の生物をみなごろしにしようにとかかっているようであった。風のないときは、万物はひっそりとしているが、いったん風が出ると、万物はうなり声をたてた。雪の上を、何かしら巨大なものが狂い舞うようであった。ひとびとは息をとめたように、ひっそりにくらした。

いつやむともなく氷雨が降りつづくと、親鸞は胸の奥まで凍りつくような気がした。京都で越後の冬を想像していたが、それは絵に描いた雪の世界にすぎなかった。

——しかし、土地のひとは、永年ここに住みついているのだ。苛酷な自然と闘っているのだ。表面は凍てついて枯れたようにみえる雑草が、地下で辛抱よく根だけで生きつづけるように、ひとびとは生きているのだ。

居多浜の日本海をながめることがあった。北海特有のどす暗い荒海であった。春や夏の鮮明な色失って、絵にはないような海の色であった。海がこのような色を呈するものとは思わなかった。

ようやく草庵にたどりついた。草庵の前は、お種の努力で雪がふみ固められていた。親鸞は、何よりも火が恋しかった。

草庵の中に、だれかがいた。

「お種どの？」

と、呼んだ。藁沓が、そこにあった。沓についている雪はとけもせず、凍りついていた。いろりのそばから見知らぬ男が立って来て、笠を脱ぐ親鸞の前で両手をついた。僧形のひとであった。

「お留守に参上しました。明慶と申します」

親鸞はいろりのそばに坐った。いろりの火は、親鸞が出がけに灰をかむせたままになっていた。留守中に上りこんだ僧は、煖をかきたてることもせず、寒い草庵の中で何時間も待っていたようであった。親鸞は見知らぬ僧の態度に、節度のあるのを感じた。戒律のきびしい寺院で修行をしたひとのようであった。親鸞は、火をもやした。

「私はもと、源氏の祿を食む土屋氏五郎重行と申しました。思う仔細があつて出家をいたしました。現在四ツ辻村に住んでおります」

頸城郡四ツ辻村といえは、ここからかなりはなれていた。

「かねてからよき師にめぐりあいたいと念願しておりました。ご房が京からこの地においでになったことを知りました」

「雪の中を、わざわざ四ツ辻村からおいでになったのですか」

「めったに四ツ辻村をはなれたこともないので、一里も先のことは、まったく知らぬ他国でございます。偶然行商人が、ご房が、国分寺におあずけになっていられるということを教えてくれました。ご房が法然上人のお弟子で、浄土宗の法難の際、越後に流刑となられたお方と知りまして。このような田舎におりますと、よき師にめぐり合うことはございません。出家求道も、迷うばかりでございます」

「この地には、おなじ法然上人のお弟子であつた西仏房がおいになる。西仏房には会ってられないのですか」

「噂にはきいておりますが、いまだにお目にかかる折がなく……」

「何故私をめざしておいでになったのか」

「ご房は、法然上人と同時に罪科をうけられた、門弟の中でも数すくない高弟のお方と思いました」

親鸞は、苦笑した。いろりに手をかざしていると、焰をうけているからだの半分は熱くなるのだが、背中まではあたたまらなかつた。一つのからだの中で、表と裏があたかさと寒さを区別して感じるのだった。明慶はいかにも素朴な人柄を感じさせた。明慶が改めて両手をついて、

「私を、お弟子にしてくださいとうございます」と、床に額をつけるようにした。

「私も修行中。しかし、私には師の教えをひとに伝えることは出来ず。ご房も修行中、ともに修行を重ねていきたいと思います」

「おゆるし下さいませ。ありがとうございます。私は、ごらんのように壮健でございます。四十三になりましたが、病気ひとつしたことはありません。犬馬の労をいといません」

壮健という点では、親鸞はひとに劣らなかった。これまで病氣らしい病氣をしたことがなかった。

そのときから、明慶は親鸞の弟子となった。明慶は荷物をもって来たが、その中には食糧も用意されているようであった。

草庵生活の食糧といえば、最小限度郡司から支給されていた。栄養失調にならない程度であったが、流人という太政官符がものをいうからであった。お種の指導で、親鸞は春から夏にかけて、畑に野菜を植えかえたり、種をまいて、収穫を得た。労働というほどのものではなかったが、親鸞は坐していたわけではなかった。が、雪の季節となると、畑仕事は出来なかった。

食事の面倒は、その日から明慶がすることになった。

夜おそく、お種があらわれた。親鸞のほかにもうひとり、僧をみて、おどろいた。親鸞は微笑して、

「こちらはお種どのといって、近くの森家の方だ。私の面倒を親切にみてくれる、いまでは熱心な念仏者です」

明慶がお種に向って、両手をついた。

「明慶と申します。今日から親鸞房のお弟子にしたいだきました」

ひとからていねいな挨拶をされたことのないお種は、板の間に膝をついたが、返礼にとまどっているようであった。親鸞は微笑した。

三人は、いろりをかこんだ。

せまい草庵に同居人がひとりふえることになったが、着のみ着のまま眠るのである。いろりの火は絶やすわけにはいかない。親鸞は横になって眠るが、明慶は柱によりかかったまま眠ることになるらしい。雪はしんと降りつづいた。

親鸞は、大無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経の浄土宗の聖典の三部経を口の中で唱えるのを日課としていた。経本を必要としなかった。一字もあやまらず暗誦した。法然の「選択本願念仏集」も諳そらんじていた。熱心に念仏を唱えているときもあった。

武士から出家した明慶には、浄土宗にはいるべき素地がなかった。頭をまるめただけで、仏道がわかるというものではなかった。「選択本願念仏集」をかみくだいて話される

ことが、明慶には大変よかった。九条兼実が浄土宗入門書として、心の柱としていつもそばにおいていたと頼んで法然に書いてもらったものだが、それは兼実ひとりのものではなかった。

いろりの火にあたりながら、明慶は親鸞の口をみつめるようにして法話をきいた。「選択集」に引用されている仏典のことだけでなく、他にいろいろと引用する親鸞の知識の豊かさ、記憶力の強靱さに明慶はしばしば感動するのだった。親鸞は、参考書をひらくというのではなかった。明慶はこのひとを師に仰いだことがまちがいでなかったと、しみじみ思った。

明慶の身の上話から、縁者が四ツ辻村に残っていることを親鸞は知った。

「妻と子は病気で亡くなりました。このまま武士をつづけたところで、出世するみこみもなく、生きていくことがいやになりました」

といって、死ぬことは思いもよらなかったのだ。そういう観念は、武士である明慶にはないものであった。

お種とちがい明慶は、いろいろと世間のことを知っている。土地の人間だけに明慶はさまざまな職業のひとつと知合があった。親鸞は、居多浜の漁師の話をきいた。山岳地帯で生きものを殺して、生計をたてている獵師の話をきい

た。

「頸城郡は、どこよりも田圃が多く、米もよくとれますので、人氣も一応はおだやかでございます」

「それに三善氏がよいひとだから、みんなは比較的楽にくらしているであろう」

「しかし、それもただよその国にくらべての話にすぎません」

労働は恥辱に値する賤業とされていた。それに従うものは下人であり、「愚也、白癡也」とされた。「身無善根、家無財産」ものとされ、天下之野戾とされた。牛馬同様売買されている事実を、親鸞は知った。

親鸞も比叡山で堂僧をつとめていたころ労働をした。しかしそれは、僧としての修行の範囲内であった。

領主は、農耕による収穫の七割から八割を徴集した。数数の仏事や神事にことよせて取りあげた。それにたえかねて、農民が逃散した。逃げたものが多い場合は、耕作に労働力が不足するので、逃げた農民の仲間に責任をもたせた。その命に従わぬものは、耳を切るとか、鼻をそぐとか、宙吊りにするなどおどかさされた。実際に鼻をそがれた農民もあった。親鸞は鼻のなくなった放浪者をみかけたことがあった。病気のせいかと思った。が、そうでないことが、あとになってからわかった。